J. Conrad: *The Nigger of the Narcissus* に見られる海の位相について

斎藤和夫

1. 序論—英文学に於ける“海”の象徴性の研究

イギリス文学に於て“海”を度外視することは不可能である。Beowulf 以来，Celt 系伝説，Shakespeare, Defoe, Coleridge, Byron, Tennyson, Conrad, Masefield, Woolf, Auden, T.S. Eliot など，イギリス文学は海の伝統や経験，象徴性に育てられてきたと言って過言ではない。しかし，海はそれ自体の自然現象以外に形象をもたない漠とした広がりの世界であり，また文学も個々の作家・詩人が持つ内面世界は容易に他者との共通化・類型化を許さない identity にその価値を見出す世界である。それであるから，この両者の出会いも多様であり，百人百様の海の世界が現出すると言ってよく，文学に於ける“海”の位相を横断的に分類し類型化して整序することは至難のわざである。いきおい，従来は個々の詩人・作家の作品に現われる海の諸相を鑑賞的態度で記述するに止まることが多かったのは，止むを得ないことで，体系化された研究は豊富であるとは言い難いのである。筆者が見渡した範囲では僅かにつぎに挙げる2著がこのような体系化・総合化への方向性を示していると考えられる。

(1) W.H. Auden: *The Enchafèd Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*[1]

(2) John Bourke: *The Sea as a Symbol in English Poetry*[2]

この2著の性格は互いに可成り異なっている。即ち，前者は詩的直観と論理性が微妙な混合をなし，この詩人・批評家の思索の跡を辿るのに辛苦することが多いが，またそれ故の魅力ある essay で，その説くところを要約すれば，海が文学に於ける romanticism に如何に寄与してきたかを，たとえば砂漠や都市の場合と比較・対照しながら考察したものである。これに対し後者は，イギリス文学の豊かさの源泉である詩の genre に於て，“海”がいかなる抽象概念を象徴するために用いられたかを，ある程度分析し整序して，下記の3類型に包括したものである。

(1) 自由を象徴するもの

(2) 多面にわたる人間生活を象徴するもの

(3) 永遠性を象徴するもの

(1)について Bourke はさらに i) 狭義の物理的・形而下的自由と ii) 広義における精神の自由とに分け，(2)について i) 人間生活を航海によって象徴する場合 ii) 潮の干満によって運命・感情・勢力の変動を表わす場合 iii) 人生の終点ないし目的を港や避難所によって示す場合，iv) 海上の気象と危険によって人生の有為転変を表わす場合 v) 航海用具や水先案内人によって人間を正しい方向に導く何物かを表わす場合，と分類する。著者はこの項にもっとも紙数を費やしている。(3)は我々を内在の世界から超越の世界に飛躍させ，海の象徴性のもっとも本質的なものと捉えている。この項も i) 人間の行動と直結しない，謂わばそれ自体のうちに充足する永遠性 ii) 人間に明確な関連を有する永遠性，と分け，以上についてそれぞれ豊富な例を英詩に求めている。Bourke の意図がどれ程に達成されているかの評価は別として，このような観点から英詩に見られる“海”の象徴性を分類する企画は先駆的であり，この深化・発展は

大いに期待されるが，このような研究の場合，Ludwig Witgenstein の下記のことば，

「説明を企でる，ということはすでにつぎの理由で失敗している，と私は信じる。すなわち，人は自分が知っていることを正しく集めるだけでなければならず，何もそれに付け加えてはならないし，また，説明を通じて求められる満足は，その結果としておのずから生ずる，という理由によってである。」[3] に含蓄されている警告を考慮し，性急に分類わくを設けて説明を急ぐことによる事実の歪曲を招くことや，詩人・作家がせっかく“海”から汲みあげた卓越したことばの宝を，再び錯誤の沼に沈める愚を避けなければならない。換言すれば“海”が象徴すると思われるものを忠実に記述することから出発し，決して結論を急がないことである。この意味で John Bourke の著書は，数多くの例証を挙げながら過度の共通化，類型化を避ける慎重さを具えていると思われる。

とはあれ，差し当りこの方面の探求に当たって，genre は詩に限られているが，良き guide-book の役を果たしそうである。なお，小説に関する文献探索の必要は今後増してくるであろう。

2. J. Conrad の経歴と *The Nigger of the Narcissus* の位置

J. Conrad (1857–1924) はイギリス文学のなかで特異な位置にある。生れながらのイギリス人でなく英語能力の獲得は成人してのちであるのに，英文学の作家として一流の作品を世に送ったのは彼を除いてはひとりも居ないのである。それ故に彼に関する伝記的研究はかえって豊富であり，彼自身の作品でも自己を語るものが多い。小論では，その細部に亘るのを避けて，*The Nigger of the Narcissus* の執筆・発表に至るまでを概観するに止めたい。

(1) ポーランド人時代（1857—1874）

彼はポーランド東部地方の地主階層に属する知識人で急進的な民族主義者である Apollo Korzeniowski を父とし，同じ階層の Evelina Bobrowski を母として生まれた。5才のとき父の独立運動が占領国ロシヤの官憲に摘発され，北部ロシアに流刑に処されたのに一家で伴なったが，2年後母は結核で世を去り，父もまた流浪の果てに4年後 Cracow で死去したため，11才で孤児となり，これ以後は母の弟 Thaddeus Bobrowski に養われ教育を受ける。14才頃から船乗りを志ざしたが，この志望は海を見て魅せられたのではなく，海洋小説や航海記などに根ざしたものであるらしい。最初は反対した叔父も遂に折れて，1874 Conrad 16才の時フランス南岸 Marseille 港に旅して，フランス船に最下級の船員として乗り組む。

(2) 船員時代（1874—1894）

当初はフランス船で3年半を過ごし，1878年イギリス船に乗り組んでイギリスを訪れたのを機に，それから16年を主にイギリス船に乗り組み，この間英語の習得と海技の練磨に努め，見習い船員から2等航海士，1等航海士に進み，遂に1886年船長の試験に合格した。また同じ年に英国国籍を取得した。船員の身分格差の厳しさを考えると，破格とも言える。この20年に亘る船員生活が，後年の彼の Sea Novels 等に貴重な source となったのである。

(3) 作家時代（1894—1924）

1894年，Conrad は36才で20年に亘る船員生活から足を洗った。これは必ずしも彼の本意ではなかったらしい。帆船から汽船への急速な転換の時代のあおりを喰ったことが推察される。その数年前から既に小説に手を染めていたらしく，翌95年に第1作 *Almayer's Folly* を世に出し，次いで96年に *The Vagabond* を出し，同年にイギリス娘の Jessie George と結婚した。第3作として97年に小論で扱かう *The Nigger of the Narcissus* を出すが，この作品によって彼は作家としての地位を確立したということが定説となっている。作家自身もこの作品には相当

な期待と自信を持っていたとされている。この作品の舞台となっている The Narcissus という船の名は，1984年に彼がインドからの帰り船として乗り組んだ実在の船名であり，その経験が中心になってはいるが，船長以下の crew，とくに Wait なる黒人が同船の乗組員であったという記録はない，要するに，Jimmy Wait を含めて彼が船員生活を送っているあいだに心ひかれた人物像（良きにつけ悪しきにつけ）の集大成と考えたほうが正しいと思われる。この意味に於てこの作品は，Herman Melville にとって，*Moby Dick* が彼の捕鯨船生活の総決算であったように，彼の帆走船の船員生活の総決算的作品であった。謂わば記念碑的作品なのである。

3. *The Nigger of the Narcissus* に見られる "海" の諸相（梗概を追いながら）

イギリス帆船 Narcissus 号が本国に帰航するためインドの Bombey で新規に雇い入れた水夫達が水夫部屋に集まってくるところからこの小説が始まる。これから始まる航海で起る，水夫間の葛藤，水夫達の高級船員に対する反抗，自然の暴威に対する戦い，長期に亘る航海で起こり得るすべてがこの小説に集大成されている。題名の *The Nigger* は，このなかで黒人船員 James (Jimmy) Wait が死期に近づいて水夫達に大きな精神的影響を与えているのでついた名であるが，彼のことのみを語っているわけではない。船長以下全乗組員，船，そして海がひとつの mass となってこの物語りが完結性をもち，感銘を与えるのである。

さて出港前の水夫室に顔を揃えた水夫の何人かが紹介されるが，本文中の表現を借りながら描くと，

* Craik (nicknamed Belfast)
  ... romancing on principles, ...[4]
  好んで大袈裟な言いかたをする男
* Archie
  ... and pushed the needle steadily through a white patch in a pair of blue trousers ...[5]
  暇をみては針仕事を黙々とする静かな男
* Wamibo
  A Fin who stood pensive and dull ...[6]
  いつもぼんやり夢想に耽るフインランド人
* two young giants with smooth, baby faces ...[7]
  ふたりの無邪気な若いスカンディナヴィア人
* Old Singleton
  an old salt who had sailed to the southward since the age of twelve, who in the last forty-five years had lived no more than forty months ashore,[8]
  海を住み家とする典型的な老水夫であり，海上歴45年，どんな場合でも船乗りの義務を忘れない超人的かつ哲人めいた seafarer である。
* Charlie
  a puzzled youngster muttering at his work[9]
  まだ水夫生活に馴れていないのに一人前の顔をしたがる男
* Donkin
  an ominous survival testifying to the eternal fitness of lies and impudence[10]
  いつの世でも嘘や鉄面皮がまかり通ることを証明するような，狡い立廻りだけで生きる小悪党

この水夫達が船尾上甲板に集められて一等航海士 Mr. Baker の点呼を受けるが，一名不足であり，その名前もよく読み取れないので解散させようとすると，“Wait” と大きな声が響き渡る。「待て！」と声をかけられたと Mr. Baker がムッとすると，その男は “My name is Wait—James Wait.” と言う。このような奇妙な登場のしかたで，問題の黒人が紹介されるのである。彼の第一印象は，

* James Wait (Jimmy)

... a head vigorously modelled into deep shadows and shining lights—a head powerful and mishappen with a tormented and flattened face—a face pathetic and brutal: the tragic, the mysterious, the repulsive mask of a nigger's soul ...[11]

頭を昂然ともたげながら，顔は苦悩にあふれ，うちひしがれ，痛ましげな，悲劇的かつ神秘的な近づきがたい印象の持主である。この描写は彼のこれから迎えようとする悲劇的運命を暗示し，また肺を病んでいるらしいうつろな大きな咳は皆を驚かせ不安がらせる。

解散後，皆と一緒に水夫部屋に向かう途中，彼は厨房を覗き込んで料理人に突然大声で挨拶し，料理人を驚かすが，この料理人 Podmore は，

He was a serious-minded man with a wife and three children, whose society he enjoyed on an average one month out of twelve. When on shore he took his family to church twice every Sunday.[12]

1年に1月は必ず家庭の団欒を楽しむ男で日曜日には2回教会に行く，船上でも聖書を手に持ったまま眠り込むほどの熱狂的なキリスト教徒である。

この黒人 Jimmy と Podmore の突然の出会いは，あとで述べられるふたりの葛藤を思い合わせると暗示的であることがわかる。（この小説の研究書の多くは Podmore について多く触れていないが，小論では重要な人物として扱かわなければならないだろう。）

いよいよ Narcissus 号は Captain Allistoun の指揮のもとに出航し，暫しの間は，順調で平穏な航海を続ける。

The smiling greatness of the sea dwarfed the extent of time. The days raced after one another, brilliant and quick like the flashes of a lighthouse, and the nights, eventful and short, resembled fleeting dreams.[13]

（ほほえむ海の拡がりにくらべて，時のひろがりはちっぽけに見えた。昼は明るく輝いては一瞬にして消える灯台の閃光に似て，次から次へと移り，夜は仕事が多いが短かく，束の間の夢に似ていた。）

このような順調な航海のあいだの水夫達の心情を，Conrad はつぎのように述べている。

The men working about the deck were healthy and contented—as most seamen are, when once well out to sea. The true peace of God begins at any spot a thousand miles from the nearest land; and when He sends there the messengers of His might it is not in terrible wrath against crime, presumption, and folly, but paternally, to chasten simple hearts—ignorant hearts that know nothing of life, and beat undisturbed by envy or greed.[14]

（甲板で働く者はみな健康でご機嫌だった。もっともひとたび陸地をはなれれば，たいていの水夫は健康でご機嫌なのだ。一番近い陸地でも1,000浬離れている海上では，それがどこであろうとも，神が祝福する真の平和が訪れ始める。神はその意志を示す風浪のような使者を送るときも，神は人間達の罪や傲慢さや愚かしさを怒ってそうするのではなく，単純，無知で人生のことを何ひとつ知らず，嫉妬心や貪欲に心乱されることのない汚れない心の持主達に試練を与えようという親心からそうするのである。）

これは陸上に住む健全なキリスト教徒ならば誰しも抱く素直な神への帰依心の表白であり，極めて保守的でポーランド人的なカトリック信者で，現在 Canterbury の Roman Catholic Church の墓地に眠る Conrad を思えば，何も不思議もなさそうな心情である。しかし，これからあと London 港到着までの間に繰りひろげられる劇的状況のなかで，このような神への帰依が影をひそめてゆく。これが最初にして最後のキリスト教的信念の表白なのである。Conrad は意識していたかどうかは不明であるが，これを最後に船上からキリスト教での神が後退していき，これに代って“海”そのものが人間に支配力を揮い出すのである。この小説を読んで筆者がもっとも関心を持ったのはこの経緯である。

前述の順調な航海が続いているある夕方，手すきの水夫達が船首近くの水夫部屋（余談だが水夫部屋が船首近くにあるのはごく当り前のことで，live before the mast が平水夫として乗り組んでいることを意味している。）の上の甲板で談笑していると，下の水夫部屋から呟きと呻きが聞こえ，戸口から Jimmy が顔を出すと，この場の和やかな雰囲気が瞬時にして凍りついたようになる。彼の身辺から，

a black mist emanated from him; a subtle and dismal influence; a something cold and gloomy that floated out and settled on all the face like a mourning veil.[15]

（黒いもや，名状しがたい暗い妖気をもつもやが彼から立ち昇っていた。冷たく陰気な空気が，弔いのヴェールのように，居合わせるみんなの顔におおいかぶさった。）

Jimmy の出現によって，つい先刻まで，... beaming with the inward consciousness of his faith, like a conceited saint ... うぬぼれ聖人のように，自分の信仰の篤さを自覚して得々としている料理人 Podmore も，

the cook became more crestfallen than an exposed backslider;[16]

（非をあばかれた背教の徒も及ばぬほどの意気消沈ぶり）を示すのである。

これ以後，Jimmy はさながらこの船に憑きまとう死神のように，水夫達の不安と畏怖を呼び起こし，水夫達は彼の心と身体をいたわることに気を遣い，時には高級船員の為の食べ物を Podmore の眼をかすめて盗んで彼に貢いだりする。この状況は船長の眼には船内の士気の衰え，規律の弛緩と映り，料理人は，

... the Satan was abroad amongst those men, whom he looked upon as in some way under his spiritual care.[17]

（悪魔が水夫達の身体に宿ってあちこちに広がり，彼らの魂を救うのが自分の義務であるかのように思った。）のである。

しかし，Jimmy の身辺に漂う死の影に全く動揺しない人物がこの船に少なくともふたり存在する。ひとりは Old Singleton であり，もうひとりは Captain Allistoun である。このふたりは，根っからの船乗りで，海と船とを愛し，つねに自分の義務と職責を忘れない典型的な seamanship の持ち主なのである。Singleton は Jimmy に，“Are you dying?”[18] と問いかける，一同唖然とするうちに Jimmy が，“Why? Can't you see I am?”（何だって，俺が死にかかっているのがわからないのか？）と問い返すと，

“Well, get on with your dying. Don't raise a blamed fuss with us over that job. We can't help you.”[18]

（じゃ遠慮なく死んだらどうだ。こんなことにおれ達を引き込んでつまらない騒ぎをするなよ。おれ達にはお前を助けることは出来んからな。）と穏やかながら真理を説いて，Jimmy をがっくりさせる。Captain Allistoun は，船内の Jimmy をめぐる雰囲気をよそに，‘この船を向かい風に逆らってじりじりと押し進め，縮帆して斜めに船を傾むかせながら大波を乗り切ることに全神経を集中している’[19]

Bombay 出航後32日目から船は南アフリカ東方海上で暴風域に入り込む。この暴風の描写は，Conrad の *Typhoon* に比すべき見事なもので，彼が船員時代に遭遇した暴風の経験の essence と言ってよいであろう。また，このあたりから，引用 (14) に見られた陸上のキリスト教徒が普通持つ宗教感情に代って，"海" そのものが神の座にあるかのような表現が頻りに現われてき，the sea ではなく the immortal sea と表現されることが多くなることは注目すべきである。この危機のなかでその持場を全く離れなかったのが矢張り船長と老 Singleton である。砂漠の闇のなかで神とたたかうことによって Jacob が神に愛される Israel（神とたたかう者）になったのと同じく，"海" と必死に戦うことによってのみ，"海" に愛され救われる，このような seaman の信仰を確乎として持っているかのように，このふたりは嵐の海での操船に全霊を傾けている。Conrad がこの小説で最も書きたいと思った人物像と考えられる。（このふたりのこの小説に於ける位置と意味については，Paul Bruss の *Conrad's Early Sea Fiction*[20] で詳しく論じられているが，可成りの象徴性を認めている。）

嵐のなかで ballance を失なうのを防ぐために，船員達は帆柱を切り倒そうとするが，船長は断乎として切らせない。結果的には半水没状態となった船を風の力で復元させたのは帆柱のおかげなのであり，船長の判断は妥当だったのである。また Singleton は暴風が終るまで30時間舵輪を握ったままだったのである。勿論他の船員達も苦闘したのではあるが。

この船は遂に横倒しの水没状態になる。料理人 Podmore は木柱に抱きついて，しきりに「主の祈り」を唱えているが，だれもこれに応ずるものはいない。彼の祈りはこの嵐の船上では全く場違いで戯画的ですらある。この時水夫の誰かが「水を一杯飲みたい。」と言うのを耳にして，彼は自分の職務を思い出し水を配って歩く。そしてこのあと船尾の水桶に倚りかかって，trance 状態で「神の摂理」とか「復活」とかについて説教をする。

突然水夫達は Jimmy が彼の病室（水夫部屋から移されていた）に閉じ込められていることに気づき，危険を冒して彼を救い安全なところに移す。水夫達にとって彼はいつも厄介者であり，現に救い出されながら悪態を吐く恩知らずであるが，

> though we hated him more than ever—more than anything under heaven—we did not want to lose him. We had so far saved him; and it had become a personal matter between us and the sea.[21]
>
> （この時われわれは以前にもまして彼を憎んだ。この世の何物よりも彼を憎んだが，不思議に彼を失ないたくなかった。ここまで彼を救けてきたんだから。これはもうわれわれと海とのあいだのひそかな因縁事なのだ。）[22]

船は水に浸り，水夫達は寒さに震えながら沈没を覚悟しているとき，

> A sudden voice cried into the cold night, "Oh Lord!" No one changed his position or took any notice of the cry.[23]
>
> （突然誰かがこの寒い闇に向かって「おゝ神よ！」と叫んだが，誰も身じろぎもせず，その叫びに注意を払うものは居なかった。）

戦場に神は居ない，という言葉があるが，嵐の海にも神は居ないのである，"海" を除いては。Podmore すら絶え絶えの祈りのあいだに，Mr. Baker から皆に熱いコーヒーを作ってやれと命じられた時に眼覚めた職務観念によって，生気を取り戻し，勇気が湧くのである。[24]

やがて夜が明け始めると，突然船長が「下手廻し！」と号令し，Mr. Baker を通じて船員達を操帆に駆り立てる。復元作業が効を奏し船は起きあがり，再び走り出す。このあとの Conrad の文は，まさしく "海" を神の座に据えるものである。

> On men reprieved by its disdainful mercy, the immortal sea confers in its justice the full privilege of desired unrest. Through the perfect wisdom of its grace they are not

permitted to meditate at ease upon the complicated and acrid savour of existence, ... the weary succession of nights and days tainted by the obstinate clamour of sages, demanding bliss and an empty heaven, is redeemed at last by the vast silence of pain and labour, by the dumb fear and the dumb courage of men obscure, forgetful, and enduring.(25)

（不滅の海は尊大な慈悲をもって人間に死の猶予を与えた。その代わり海は，正義にもとづき，人間の望むにまかせて生の不安という全特権を与えた。しかし，全智全能にして恩寵豊かな海は，人間が人生の複雑な辛苦をあれこれと思い煩うことを許さない，……祝福だ，天国だなどと空しいことを言う陸の賢者達の騒がしい喚きにけがれた退屈な長い日夜は，苦痛と労苦を湛えた大きな沈黙と，めだたぬ，そして過去をくよくよ思わぬ，辛抱強い人達の声にはならない畏れと勇気によってはじめて償われるのである。）この文の“海”という語を“神”と置き換えると，ただちに陸上のキリスト教徒の信仰の表現に変るであろう。そして「祝福」「天国」などと喚く陸の賢者どもという表現から，料理人 Podmore が想起される。彼の祈りや説教が何とも場違いな滑稽感を与えることを強く感じるのである。（繰り返しになるが，Conrad はキリスト教徒である。その彼がこのような異教的感情を持つのは，海という場の与える特別な効果によるのであろう。）

船が順調に走り出して，やっと舵輪から解放されて，老 Singleton は30時間ぶりに水夫部屋に帰ってくる。この超人的な労苦に疲れ切って当り前の筈だが，若い時には何とも思わなかった疲労に，自分も年を取ったとうちのめされた気持になる。はじめて自分の老いを知った彼の眼に映ずる海は，

He looked upon the immortal sea with the awakened and groping perception of its heartless night; he saw it unchanged, black and foaming under the eternal scrutiny of the stars; he heard its impatient voice calling for him out of a pitiless vastness full of unrest, of turmoil, and of terror.(26)

（彼は不滅の海に眼をやった。その無情な威力は，今になって少しずつだが彼の心にひびいてきた。眼前の海は昔と変りなく，星が永遠に輝くその下で，くろぐろと拡がり泡立っていた。耳をすますと，動きやまず騒ぎやまぬ，恐怖に満ちた無情の海は，彼を待ち兼ねる声で呼んでいた。）海は不滅だが，Singleton はいずれその身を海に委ねて，永遠に憩うことになるであろう。

再び平穏な航海に戻ってそれが暫らく続くと，水夫達はこの船を救ったのは自分達の自発的な労働の結果で，高級船員達は何もしなかったのだ，と自惚れ始め，反抗心が芽生えてくる。これを助長したのが Donkin の煽動である。怠け者で水夫の風上に置けぬ奴だと，彼を軽蔑しながらも，彼の弁舌と水夫の権利を擁護する甘い言葉と，彼の Jimmy に対する親切（見せかけだけで，後述するように，魂胆あっての親切なのだが）などによって，水夫達は Donkin のなかに自分達の代弁者を見出したように錯覚するのである。彼の Jimmy に対する親切は，他の水夫達が暴風で身の廻り品をすべて流されてしまったのに引きかえ，Jimmy だけが彼に与えることの出来る品物を持っていること，多分金も持っているであろうこと，など遺産目当てなのであるが，水夫達はお人好しで疑がうことを知らず，また Jimmy すら気を許すのである。

もうひとり Jimmy に特別な関心を持つ人物がいる。料理人 Podmore は，Jimmy の来るべき死に特に関心を抱き，お茶を持って見舞いに訪れたとき，突然この男の霊魂を救うべしとの神の声を聞いたように感じて，無理やり Jimmy に懺悔を迫り，神の祝福を与えようとする。Jimmy にとっては，意識の外に押しやろうとしている自分の死を，いや応なく悟らせようとする悪魔の声に聞こえ，大声で激しく抵抗する。(27) この騒ぎをききつけて船長と他の水夫達が

Jimmy の部屋の前に集まって来る。船長に叱責されて Podmore が立ち去ると，Jimmy は，

"He lies," gasped Wait, "he talked about black devils—he is a devil—a white devil—I am all right."(28)

(「あの嘘つきめ！」ジミーはあえぎあえぎ言った。「黒い悪魔のことなどしゃべりくさって。あいつこそ悪魔だ—白い悪魔だ—おれは病気なんかじゃないんだ。」) それに続いて Jimmy は，「自分はもうすっかり良くなったから働かせてくれ。」と船長に哀願する。船長は（この病人を寝かせておこうと言う配慮からだと，あとで説明しているが）今迄仮病を使って怠けていたと叱責して，その罰としてこれからも部屋で寝ていろ，と命じる。この機を逃さず，水夫達の Jimmy に対する同情心や船長の酷しい処置に対する反感を利用して，一気に反乱に持ち込もうと Donkin が煽動し，闇にまぎれて索止めピンを高級船員達に投げつける。まさに一瞬即発という時，船が突然揺れる，知らず知らずに風に立って，帆が風をはらんだのである。船長はこれに対処する仕事をつぎつぎに命令し，水夫達は持ち場に走り，この反乱は自然解消となる。

It was as if an invisible hand had given the ship an angry shake to recall the men that peopled her decks to the sense of reality, vigilance, and duty. —(29)

(それはさながら見えざるものの手が怒って船を揺すり，甲板にむらがる人間達に，現実に目ざめよ，注意を怠るな，義務を果たせと命じているかのようであった。) 状況から考えて，この「見えざるもの」は矢張り"海"と判断してよいであろう。

水夫部屋に戻ったのちも，Donkin と同調者が挫折した反乱を再興しようと煽動を試みるが，これを黙らせたのは老 Singleton の諦観に満ちたことばと，特に Jimmy の死についての神託に似たつぎの言葉である。

"Stop ashore—sick—Instead—bringing all this head wind. Afraid. The sea will have her own. —Die in sight of land. Always so."(30)

(船に乗るべきじゃなかったんだよ，あの男は。病人なのに。そうしないもんだから，こんな逆風になったのだ。びくびくしたって，海は必ず自分の思いを遂げるんだ。あの男は陸が見えたら死ぬ。いつもそうなんだ。) 水夫達はこの「海の申し子」とも言うべき老水夫のことばに打ちのめされて黙り込んでしまう。

翌朝，船長は水夫達を集めて叱責したうえに，Donkin に向かって，「この索止めピンをもとあった場所に返してこい。」と命ずる。これを投げつけたのはお前だと極めつけるように。Donkin はすっかり船長に気を呑まれて，命令通りピンをもとの場所に戻す。これで水夫達の反抗も止めを刺されたのである。

このあとも，Jimmy の死に対する水夫達の不安と重苦しい感情は増すばかりである。ここで Conrad はつぎのことばを我々に投げかける。

The problem of life seemed too voluminous for the narrow limits of human speech, and by common consent it was abondoned to the great sea that had from the beginning enfolded it in its immense grip; to the sea that knew all, and would in time infallibly unveil to each the wisdom hidden in all the errors, the certitude that lurks in doubts, the realm of safety and peace beyond the frontiers of sorrow and fear.(31)

(生命の問題は，人間の言葉の有限な力では語りつくせぬ大きな問題で，水夫達は暗黙の了解のもとで，大昔からこれを手のうちにしっかりと収めている海に委ねたのであった。全知全能で，いつか時が来れば，人間ひとりひとりに，あらゆる錯誤のなかの隠された真理を，疑惑のなかに潜んでいる真実を，また悲しみと不安の向こうに存在する平安を，必ず解き明かしてくれるだろう海に。) 船乗り達が自分達の生命の問題を委ねるのは，外ならぬ"海"になるのである。ここでも"海"が神の座にある。

再びこの船に危機が訪れる。帆船の船員が嵐よりも恐れる the calm（べた凪）である。アフリカ北西洋上 Azores 群島の西端に位置する Flores 島が視界にあるあたりで，この船は無風のために全然動けなくなってしまう。Singleton の予言では，陸地が見えると病人は死ぬ運命にあるのだが，果せるかな Jimmy はここで生命が尽きてしまう。彼の死に際に立ち合った，と言うよりも死ぬのを待っていた Donkin は，Jimmy の枕の下から衣服箱の鍵を見つけて箱を開ける。彼が Jimmy の金を奪ったことはつぎの文で暗示される。

... then, still looking away, felt under the pillow for a key. He got it at once and for the next few minutes was shakily but swiftly busy about the box. When he got up, his face—for the first time in his life—had a pink flush—perhaps of triumph.(32)

（それから，まだ眼をそらしながら，枕の下の鍵を手でさぐった。すぐそれを手に入れ，つぎの数分身体を震わせながらもすばやく箱の中を忙がしく探し，次に立ち上った時には，彼の顔は，人生で始めてと言ってよい程，ピンクに輝いた，恐らくは勝利感の。）Jimmy の死は，水夫達が共有していた不安と重圧感の消失を意味する。彼らの心はばらばらになるが，少しも変らないのは Old Singleton である。Jimmy の死は，彼が船乗り生活中に何度か経験した説明し得ない神秘がまた現われただけであり，彼の信念が裏付けられただけなのである。

"Dead—is he? Of course," he said pointing at the island abeam; for the calm still held the ship spell-bound within sight of Flores. Dead—of course. He wasn't surprised. Here was the land, and there, on the forehatch and wating for the sailmaker—there was that corps. Cause and Effect.(32)

（「死んだ？　それはそうだろう。」彼は言って，真横にある島を指さした。船は呪縛にかかって動けず，フローレス島が見えるところにいる。死んだ？　それはそうだろう。こっちに陸があって，あっちに製帆手を待って屍体がある。因果の法則だ。）

Jimmy は水葬礼を受ける。船長に命じられて Mr. Baker が祈禱書を読むが，

The words, missing the unsteady hearts of men, roiled out to wander without a home upon the heartless sea;(33)

（その言葉は，不安げな水夫の心に入らずに，無情な海に家のない俘浪者のように，さまよい出ていった。）

Jimmy の遺体がなかなか滑り板を滑って行かないので，水夫達は Jimmy の船に対する執着を感じて狼狽するが，程なく水中に滑り落ち，この途端，船長は，"Square the yard!"（「ヤードを正横に！」）と大声で命令を下す。順風が吹き始めたのである。この声で Mr. Baker は，あわてて祈禱書をポケットにねじ込む。（さきの引用文（33）といい，ここでの祈禱書の扱かいといい，キリスト教式の葬礼としてお座なりの感は免がれない。）（また，料理人の Podmore は，Jimmy に悔い改めを強要した騒ぎ以来，姿を現わさない。キリスト教の熱烈な信者である彼は，この葬礼の主役であってもいいのだが，矢張り場違いなのであろう。）

Singleton は，

"What did I tell you?" mumbled old Singleton, flinging down coil after coil with hasty energy; "I knowed it—he's gone, and here it comes."(34)

（「だから言っただろう。」老シングルトンは，忙しそうにしかも力強くロープを一巻きづつ下に投げおろしながら言った。「おれは知ってたんだ。あいつが死んだら，そら，風が吹いてきたじゃないか。」）遺体を贈り物として受け取った海は，これを嘉して順風を返礼として贈ってくれた，と彼の迷信は信じるのだが，この迷信は，世界各地に普遍的に見出され，人間と同じくらいに古いのである。神と十字架上のキリストとの関係もこの思想の例外ではない，とすら考える人もいる。

かくして，Narcissus 号は危機を脱し，順風の祝福を受けて，ロンドン港に帰り着く。何日か後，船員達は給料と解雇状を受け取りに船会社の事務所に集まる。この場面に於ける水夫達の描写は意味深いものがある。まず Singleton については，

... his hands, that never hesitated in the great light of the open sea, could hardly find the small pile of gold in the profound darkness of the shore. "Can't write?" said the clerk, shocked." "Make a mark, then." Singleton painfully sketched in a heavy cross, blotted the page. "What a disgusting old brute," muttered the clerk.(35)

（彼の両手は，海上のまばゆい光のなかでは一度もためらったことがないのに，陸の暗闇のなかでは，小さな金貨の山に触れるのも心もとなかった。「字が書けないのか？」と事務員はびっくりして言った。「それじゃ何か印でもつけろよ。」シングルトンはやっと紙に汚なくべったり太い十字を書いた。「何と汚ならしい，いやな爺いだ。」と事務員はつぶやいた。）あれほど海上では頼りになる船乗りで賢い知恵の持主だった Singleton は，陸では汚ならしい無学な老いぼれへと，美事なほどの価値転換を蒙むる。海上は彼がいきいきと働く「昼」の世界であり，陸は手さぐりで動かなければならない「夜」の世界なのである。日本語では「陸にあがった河童」の比喩があるが，Conrad の描写にはまったくこの種の humour が感じられない。Singleton についてのこの場景は，海と陸とがたがいに他界であることを如実に示している。他界である以上，そこを支配する神も異なるのは当然のことである。海の神は "海" 自体であり，陸のあらゆる宗教の神とも縁を持たない。陸と空の神に Zeus を，海の神に Poseidon を配したギリシャ神話は，海の民でもあったギリシャ古代民族の輝やかしい知恵であったのである。海から来た神的なものを夷（えびす）と呼んで陸の神と峻別した日本人の知恵も，陸と海の他界性を本能的に感じたからであろうか。この船で熱狂的なキリスト教徒の料理人 Podmore が終始場違いな喜劇的人物で clown 的扱かいを受け，Jimmy の水葬でのキリスト教儀式もお座なりの感を与えるのも首肯できるものがある。（但し，Podmore の扱かいに関しては，Conrad は Catholic で，trance 状態で啓示を語る清教徒的傾向を嫌う要素をもっていた，という観点は残されているが。）

もうひとつ見逃がすことのできない叙述がある。Allistoun 船長から，「おまえの解雇状の行跡欄には良いことを書いてやれんぞ。」と言い渡された Donkin は，

Donkin raised his voice: —"I don't want your bloomin' discharge—keep it. I'm goin' ter 'ave a job hashore." He turned to us. "No more bloomin' sea fur me," he said, aloud. All looked at him.(36)

（「あんたの解雇状なぞいらないよ。そっちでとっといてくれ。おれは陸で働くんだ。」と声を張り上げ，我々のほうを向いた。「俺には海なんか糞っくらえだ。」と大声で言った。みんなは彼の顔を見つめた。）そうして彼は，

"... Yer shipmates for all that. Who's comin' fur a drink?"

（「…それでもお前達は仲間だったんだ。おれと一緒に飲みに行く奴は居ないか？」）と誘う。だが，

No one moved. There was a silence; a silence of blank faces and stony looks.(37)

（だれも動かなかった。一同は沈黙したきりだった。無表情な白けた顔と石のような冷たい眼をして沈黙していた。）

Donkin は，たぶん自分が船長に放った啖呵に対する同感と喝采を期待していたであろうが，この沈黙と無表情はいったいどうしたことであろうか。このあと Donkin を除いた水夫達は Black Horse（黒馬亭）に喜々として飲みに行く情景でわかるとおり，酒を飲むことには抵抗はない。Donkin の性格や行動に対する反発ならば，もっと表情にその色があってもよいだろ

う。Donkin の狡さや怠惰について船員仲間は船上で厭というほど知っているので，今更批難でもないだろう。Bombay で乗船した日，着のみ着のままの Donkin に持物を頒ち与えた水夫仲間，船上での反乱の煽動に同調した仲間，仕事を怠けても許した仲間，Jimmy の部屋に入り浸っている Donkin にむしろ尊敬さえ感じていた仲間，彼らは今の Donkin の言葉から，自分達とは全く異なる陸地の人間，“他界に住む人間”を Donkin に見出した，と理解することがもっともこの状況を説明できると思われる。彼らの沈黙と石のような眼は，自分達とは無縁な他界の人間に対する，断絶と疎外のしるしなのであろう。Conrad はこの断絶について，追憶の甘さを含め柔かく表現してはいるが，さらに明言する。

Singleton has no doubt taken with him the long record of his faithful work into the peaceful depths of an hospitable sea. And Donkin, who never did a decent day's work in his life, no doubt earns his living by discoursing with filthy eloquence upon the right of labour to live. So be it! Let the earth and the sea each have its own.(38)

（Singleton は疑いもなく，忠実な長い船乗り生活の記録を抱いて，優しい海の底で安らかに眠っているだろう。Donkin は一生ろくに仕事をしなかったろうが，働く者の生きる権利などを，あのいやらしい弁舌でしゃべり散らしながら，何とか暮しているに違いない。さもあらばあれだ。陸は陸，海は海なのだ。）Donkin は明らかに陸の人間とされて，海の人間とは異なる生活観のもとに暮すものと，Conrad 自身考えているのである。

4. 結　　び

梗概のなかで既に大要は尽きているので，さらに多言を費やす必要はないと思うが，いまひとつ，この作品の執筆時期について考察すると，1897年は彼が陸にあがって3年目であるが，彼は3年前に船乗りを断念していたのではなく，その後も海上生活を続けるべく仕事を求めていたが，その望みを叶えることが絶望だと見通しを持った時期とほぼ一致する。海上生活を断念した彼がこの船 Narcissus 号に託して，海のこと，船のこと，船乗り仲間のこと，などの総決算的作品を意図して，一応の成功作となったと考えられる。多様な人間と事件とをこの作品で語りながら，もっとも深い意味をもつ存在として“海”を結果的に語り，“海”が主役で船も人もその掌上で踊っている印象が強い。

Conrad にとって，“海”とは，

(1) 陸地とはまったく異なる世界，謂わば他界であり，そこに住む人間は陸の人種とは異なる人種である。ロンドンの街を酒場に向かう彼らを，

... they appeared to be creatures of another kind—lost, alone, forgetful, and doomed; ...(39)

（彼らはなにか別な人種，見放され，孤独だが，憂さをすぐ忘れ，しかも特別な運命をになう人種に見えた。）と表現するのである。

(2) したがって，ここを支配する神は陸地の神とは全く別である。海神と言うよりも海そのものに近いであろう。John Bourke は海の象徴するもののひとつに，「永遠」を挙げているが，Conrad もしばしば海に immortal と形容している。しかし Conrad のこの小説で見る限り，これに animistic な性格が加わり，古代農耕民族に見られる神的な存在，異教的な神性が加わっているように思われる。

(3) さらに，海上生活者の仲間意識を支えているのは，海上の苦難をわかち合う運命共同体

意識だけではない，陸の世界のそれとは全く異なる海への信仰と畏怖とを共有するためである。

この世界での聖職者は陸の聖職者とは異質であることは，料理人 Podmore の扱いかたによく表われている。海の伝統と自分の職務に忠実な Captain Allistoun と，船長の命令に忠実に従い，海について，その神秘について，よく弁えている Old Singleton が聖職者であろう。たとえ，陸上では常識的人間だったり，役立たずの老いぼれであっても，“海”の支配下では光り輝やく人間である。

昭和61年9月28日

Notes and References

(1) Auden, W.H.; *The Enchafèd Flood, or The Romantic Iconography of the Sea* (London, Faber and Faber, 1951)

(2) Bourke, John; *The Sea as a Symbol in English Poetry* (Eton, Alden and Blackwell, 1954)

(3) Witgenstein, L.; *Synthese 17* (Dordrecht-Holland, D. Reidel Co. 1967)（日本語訳）ウイトゲンシュタイン全集 Vol. 6（東京，大修館，1975）p. 395.

(4) Conrad, J.; *The Nigger of the Narcissus,* 1897. 小論では Kenkyusha British & American Classics Vol. 18, 1975 を用いているのでページ数はこれに拠った。実際には 100 ページ減じるとよい。p. 103.

(5) ibid.

(6) p. 111.

(7) p. 104.

(8) p. 105.

(9) p. 106.

(10) p. 108.

(11) pp. 116-117.

(12) p. 118.

(13) p. 128.

(14) p. 129.

(15) p. 131.

(16) p. 132.

(17) p. 136.

(18) p. 140.

(19) p. 149.

(20) Bruss, Paul; *Conrad's Early Sea Fiction,* (lewisburg, Bucknell University Press, © 1979) pp. 31～36.

(21) *The Nigger,* p. 170.

(22) 船上に死者を留めておくと，海はそれを欲して大暴れすると，船乗りは信じている。時を置かず水葬にしなければならない。海上で水死人を見つけて船に引き揚げることを船乗りは嫌う。この文はこの迷信を連想させる。

(23) *The Nigger,* p. 175.

(24) p. 178.

(25) p. 187.

(26) p. 196.

(27) pp. 211-214.

(28) p. 216.

(29) p. 221.

(30) p. 227.

(31) p. 235.
(32) p. 253.
(33) p. 256.
(34) p. 258.
(35) p. 266.
(36) p. 267.
(37) ibid.
(38) p. 270.
(39) p. 269.